

# スペインのコンプルテンセ大学における 彫刻教育の特質について

難波 章人\*・福田 隆眞

On the Particular Contents of the Course in Sculpture  
at Complutense University in Spain

NAMBA Akito\* and FUKUDA Takamasa  
(Received July 25, 2005)

キーワード：彫刻教育 カリキュラム 技術指導 アトリエ

## はじめに

スペインは美術の歴史が深く、世紀の天才を生み出し続ける国として有名である。17世紀には宮廷画家のベラスケス、18世紀にはゴヤ、19世紀にはバルセロナのサグラダ・ファミリアを設計したアントニオ・ガウディー、20世紀にはシュールレアリスムのダリやミロ、様々な美術運動を起こしたピカソ、巨大な鉄彫刻をつくりだしたチリーダ、現在も精力的な活動を続け、リアリズム絵画で知られるアントニオ・ロペスなどがある。

筆者難波は、2003年度にバレンシア工科大学・美術学部、2004年度にマドリッドのコンプルテンセ大学・美術学部にて彫刻を学んだ。そこで、スペインの大学で経験した彫刻教育について、コンプルテンセ大学のカリキュラムを中心に考察し、どのような教授法が行われているのかを検証する。検証の仕方として、コンプルテンセ大学・美術学部・彫刻科で開講されている13の授業のカリキュラムを紹介し、実際の受講経験を基に、内容と教授法の利点と特徴を述べる。

## I コンプルテンセ大学について

Universidad Complutense de Madrid (マドリッド・コンプルテンセ大学) は、カスティリア (スペイン中部の古王国) の王 Sancho (サンチョ) IV世が設立した General Study にさかのぼる豊かな歴史を誇っている。700年以上の歳月を経て、コンプルテンセ大学は学生数で世界第4位となる大規模な大学に成長した。大学の学生数は約10万人、また教授と職員の数は約6千名にのぼる。大学は人文科学、数学と自然科学、保健科学、社会福祉の4つの学問分野にわたる77の公式学位を授与している。マドリッドの中心から少し離れたモンクロアとソモソーガスの2ヶ所にキャンパスを構え、その面積は3万6,000

\*北九州市企救中学校フレンドリー指導員

エーカー以上におよんでいる。

美術学部は、18世紀中ごろに創立した有名な王立サン・フェルナンド高等美術学校を相続した学部である。18世紀の画家ゴヤもサン・フェルナンドで教鞭を執った歴史を持ち、シュールレアリスムの画家ダリもこの美術学校で学んだ。1978年にコンプルテンセ大学の美術学部として移転・相続された。この大学ではヨーロッパや南米の国々、また、中国、韓国、アフリカではナイジェリアなど、たくさんの留学生を受け入れている。そして、EU圏内では近年、他国との単位交換制度が確立されていることにより、優秀な学生が多く集まり、刺激の多い教育環境となっている。

美術学部全体の教員数は150名以上にのぼり、学生数は約1,100名、その中で彫刻科の教員の数は約30名である。学生は4回生になる時に、絵画や彫刻などの専攻別を決める。彫刻科の学生数は4回生と5回生を合わせて約100名。年間に彫刻の授業を受ける学生数は、1回生から5回生を合わせて約700名である。美術学部は5年制であり、スペインでは5年制が一般的である。美術科の学生の就職は基本的に造形美術関係、デザイン、映像、修復、の4つからなっている。美術教員の免許を取得する学生もいる。(教員免許を取るためには美術学部に関わらず、大学卒業後に各自で一年間のコースを取るようになる。)

## II コンプルテンセ大学美術学部の彫刻科の内容について

ここでは、コンプルテンセ大学の彫刻科の授業カリキュラム<sup>(註1)</sup>を記述し、個々の授業科目について紹介し検証する。学部のカリキュラムを対象にする。(大学院は含めない。)

### 1 彫刻入門 (一回生) (週4時間)

この授業で得る能力と目的

- ・ 立体を理解し、解釈する能力の発展を手助けする。
- ・ 道具、素材に精通して、マニュアル的に技術を発展させる。
- ・ 量感の表現方法の習熟。
- ・ 形態の解釈において、学生の感受性を発展させる。

内容

- ・ 彫刻での創造的表現の価値。
- ・ 自由な量感。描写と解釈。
- ・ 平面上での量感。描写と解釈。
- ・ 体積を測定しながらの制作(模刻等)とその表現方法。
- ・ 表現手段としての空間について。

検証

コンプルテンセ大学では、専攻分けが4回生の初めに行われるため、入学時には初めて粘土を手にする学生も多い。よって、経験や能力に応じた教育内容が用意されていて、能力に応じた効果を生み出している。また、モチーフを見ながら粘土でのレリーフの制作を早い時期に経験させることで、絵画と彫刻の違いや三次元の特徴を身に付けさせている。

### 2 素材と彫刻的技術 (1回生) (4ヶ月の授業で週6時間)

この授業で得る能力と目的

空間内での形を理解し解釈する能力を発達させるために、技術的、構成的、そして概念

的な観点について深く究める。同時に、その表現から生じた問題を解決するための基礎知識を与える。この授業では、木彫と石彫の道具の確かな知識を与える。

これらの目的で、次の主題を提起する。

- ・ 立体の解釈と正当な評価ができる能力の促進。
- ・ 表現能力として空間を確立し、材料を通しての空間認識。
- ・ 彫刻的伝達手段の進歩的発展のために、技術や概念などの理解。
- ・ 歴史的に生まれてきた伝達手段としての特殊な形についての基礎知識の習得。
- ・ 学生の個性的な制作を促進させながら創造性の発展。

絶えず、コンセプトと技術は切り離せないということと、この2つの関係の重要性を指摘する。とはいえ、彫りの実践は対象物のコピーというよりも研究のひとつの方法として把握しなければならない。それが彫刻を自覚した実践を可能にする。また、彫刻を他の知識と結びつけた独自の知識を増やしていかなければならない。

内容：2つの彫刻作品を制作する。

テーマ1：石彫、一つの石の塊を彫る彫刻作品の制作。

技術上の進行と課題の展開：

- ・ この課題は学生にアトリエでの仕事の機会を提供する。彫りの知識と能力を学ぶ。
  - ・ この課題で立体の量感の重要性を強める。
- ① 作品の観念的分析のための事前の作図。展開しようと思うアイデアの下絵を描く。作品の考え方として、頑丈で、重く、硬い素材にふさわしくないといけない。また、扱う素材のことをいつも忘れずに考慮しなければならない。石彫りは形を定めるために周りの石を取り除くという基本的概念から始めなくてはならない。下絵は参考のために最後までとっておく。
  - ② 事前の立体模型：これらの模型の制作は最初のアイデアに近づき、そのアイデアを把握するために基本的であり、より明確に石の塊の作品にとりかかるためである。これらの模型は、模倣的に石に移すためにあらかじめ決められた解決法としてではなく、制作する時の熟考と作品へのアプローチの道具として解釈されなければならない。
  - ③ 塊の体積：最初の段階である荒削りをおこなうために主な線と軸を描く。
  - ④ 荒仕上げ：余分な部分を彫り、石に主な形を与える。
  - ⑤ 彫り：適切な道具を使い、実現させようとする形体に沿って彫る。
  - ⑥ 仕上げ：それぞれのコンセプトに合わせ、彫刻の表面を加工するために適切な手段を行う。磨く、色を塗る、彫った形跡を残すなど。
  - ⑦ 目的：一つの石の塊を通して、立体的見解の分析。空間的感覚に結ばれた彫刻の特徴を確立し、造形的コンセプトと形を定める面を分析する。石が地球の自然本来の一部を形成する一つの素材であることを認識する。

テーマ2：木彫、接合した木の板を直に彫る彫刻作品の制作。

技術上の進行と課題の発展：テーマ1と同じ

- ① 作品の観念的分析のための事前の作図。展開しようと思うアイデアの下絵を描く。木は石よりも彫りやすいが、だからといって石よりも簡単ではない。扱う素材をいつも忘れずに考慮しなければならない。下絵は参考のために最後までとっておく。
- ②～⑦ 石彫の内容と同じ。

検証

ここでは、のみと金槌だけで大理石と木を彫る技術を修得する。グラインダーなどの機材を学生に使わせないことによって、古代からの技術はどういうものかを実際に体験させ、修得させている。また、手とのみの手作業による温かみが石と木に表現できることを知ることができる。

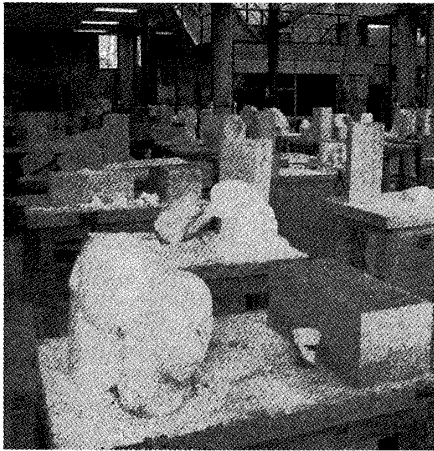


図1 テーマ1（石彫） 学生作品

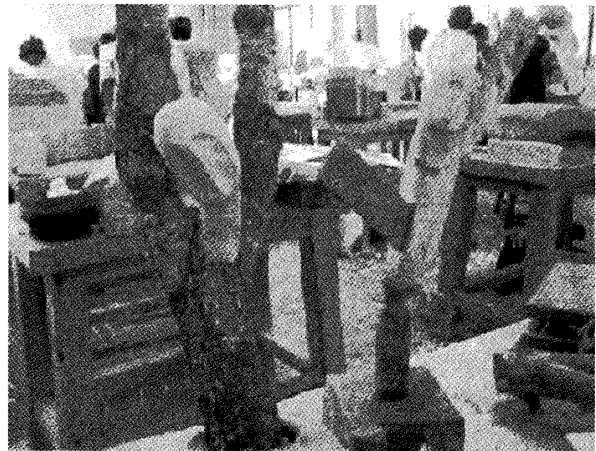


図2 テーマ2（木彫） 学生作品

### 3 彫刻Ⅰ（2回生）（年間の授業で週6時間）

この授業で得る能力と目的

- ・ 彫刻的概念の知識の道を開く。
- ・ 一つの造形的伝達手段の創造を促進する表現規律の習得。
- ・ それぞれの彫刻に適した創作過程の技法の研究。
- ・ 彫刻的概念を考えることができる確かな基礎を養う。
- ・ 表現的、技術的に熟達する。
- ・ 好奇心の動機づけと創造作業。
- ・ 異なった彫刻的伝達手段の分析。
- ・ 彫刻的概念への判断力の発展を促進する。
- ・ 関係書類の教授法。

内容

- ・ 彫刻的、造形的な伝達手段のコンセプト。
- ・ 平面と立体。
- ・ 塑像のテクニックと道具。
- ・ 古典的な模範の勉強による彫刻概念。
- ・ 創造源としての自然物の観察。
- ・ 立体像のコンセプト、技量、規則へのアプローチ。
- ・ 塑像の技術による量感表現の発展。
- ・ 古典の石膏像によって提示されているような技術的解決法の分析。
- ・ 彫刻のプロジェクトを行うことによって、学生の制作能力の発展。

検証

石膏像の模刻の授業のなかで教授から指導された言葉があるので記述する。

「石膏の模刻であるが扱っているのは粘土であり、石膏像の質感とは違っている。すでに模刻しながらも、世界で唯一の作品になっているのだ。そして、模刻しながら

も自分の感情を投影しなければいけない。」ということを教えられた。

また、石膏像の模刻をした後に、塑像へのめずらしいアプローチが見られた。それは、模刻の完成後、イメージだけで他の顔に作り変える課題である。ここでは、各個人の表現しようとするイメージを基本的な人間の顔の構造を自覚しながら、自分のイメージへと進む。その中で、自分のイメージの実体がどのようなものであるのかを、そして模刻との差異を把握できるという点で貴重な教授法と言える。

日本では塑像の心棒作りに木としゅろ縄を使うが、スペインでは大小の鉄線と金網、それらを固定する針金で作る。スペインでは歴史的に高価な木材よりも鉄材がよく使われてきた。金網を使った心棒作りでは骨組みの段階で、ある程度ボリュームができる。さらに、粘土の肉付けの量が日本に比べて少なめである。



図3 学生作品：モデルなしの顔

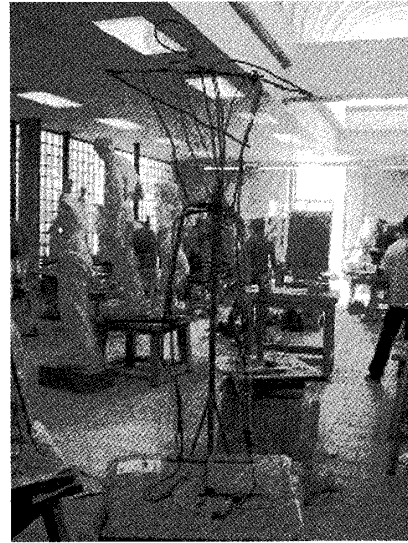


図4 鉄の棒と金網による心棒づくり

#### 4 彫刻Ⅱ（3回生）（年間の授業で週6時間）

この授業で得る能力と目的

- ・ 作品意図、形態、表現のバランスに基づくプロジェクトを練り、知識の習得と彫刻的伝達手段としての独自の考え方。
- ・ 彫刻の制作過程に関して、創造能力の発展と研究の心構えの促進。
- ・ 表現と技量の手段を広げ、彫刻的伝達手段によってコンセプト、アイデア、感動などの表現。（彫刻的伝達手段＝形が持っている深い意味を理解し表現する能力。）
- ・ 分析と実際の解釈に関する知識の強化。

内容

- ・ 彫刻的伝達手段の基本的なコンセプト。彫刻における形、素材、空間。
- ・ 表現としての彫刻。彫刻的伝達手段の独特な特徴。モデルとしての現実性。
- ・ 創造的過程。創造性とオリジナリティー。コンセプトから素材へ。

検証

彫刻Ⅰを発展させた授業が行われる。模刻としての技術よりも表現としての造形的な技術を主眼としている。よって、マッスの取り方や空間の捕らえ方を教授とのディスカッションの中で確認しつつ個性を促進させるように教えている。

スペインの中でもマドリッドは特にリアリズムを大切にする伝統と歴史がある。そうし

た背景のもと、具象を中心にそして大事に教える教授陣が多い。画家アントニオ・ロペスも学生時代、この大学の前身であるサン・フェルナンド美術学校で彫刻を学び、絵画とともに精力的に彫刻を制作している。図6はロペスの作品で素材は木である。人間の内面を見つめた作品で、非常に生々しい人間ドラマを感じさせる。このように、スペインのリアリズムは特にマドリッドを中心に伝承されていると言える。

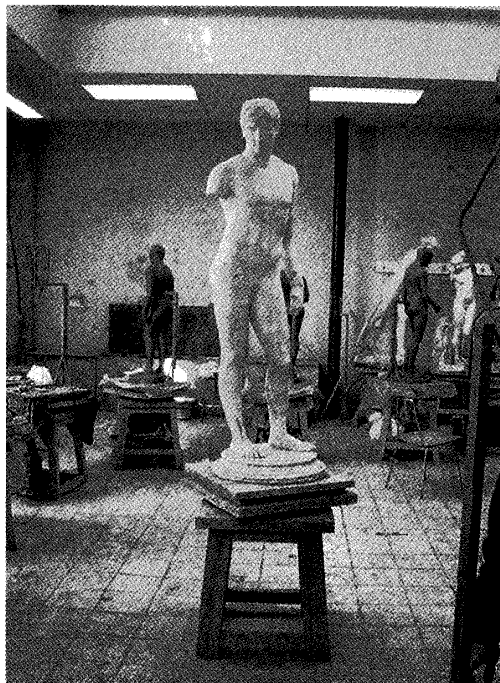


図5 塑像のためのアトリエ



図6 ロペス 『男と女』

## 5 創造と彫刻的技術（3回生）（年間授業で週6時間）

この授業で得る能力と目的。

- ・ 立体の解釈と評価の能力を促進する。
- ・ 空間を表現能力において確立し、学生に材料を通して空間に参加させる。
- ・ 学生に彫刻的言語(彫刻的伝達手段)の進歩的な発展をさせるため、有効な道具を技術と同様に与える。
- ・ 歴史によって伝えられた彫刻的言語の中で、特殊な形についての基本的な知識を習得する。
- ・ モデル自体の表現の豊かさと創造を促進しながら、創造性を発展させる。

### 内容

石彫：アラバスター、または砂岩のブロックをのみと手で直彫りする彫刻の制作。

- ・ 使用するコンセプト：テーマの選択；スケッチと立体模型の制作；モデルを形成するために面を用いた量感の勉強；全体の輪郭の設計；石の荒削り、直彫り、仕上げ。
- ・ 技術的過程：この課題は学生にアトリエでの仕事の機会を提供する；一つの石の塊から始め、丸い量感の形状による面の配列に関する彫りの技術と知識を学ぶ；この課題で立体の量感の重要さを知る。

木彫：柔らかい木からできた大きな板を接合したものを使う。丸のみなどを使って手で直彫りする彫刻の制作。

- ・ 使用するコンセプト：テーマの選択；スケッチと立体模型の制作；モデルを形成する

ために面を用いた量感の習得；全体の輪郭の設計；石の荒削り、直彫り、仕上げ。

- ・ 技術的過程：石の授業で修得した知識と能力を発展させる。石彫の授業と同じように丸い量感の形状による面の配置と彫りの技術を確立する。

#### 検証

この授業では砂岩(砂を人工的に固めたもの)やアラバスターという大理石と比べて非常に柔らかい石を使った手彫りの制作を行なう。一般的には、彫りの作業・技術は粘土での塑像に比べるとやり直しのきかない面が多い。よって、柔らかい石・木を素材とすることで学生の彫ろうとする形が到達できるよう考慮されている。図7は自己の受講作品で、アラバスターの頭像である。アラバスターは半透明色で、スペインではよく産出される石であり、光が当たると石の内部が透けて、とても美しい。自国で採れる素材を授業に取り入れて、大事にしている点は特質すべきである。



図7 自己作品 アラバスターの頭像



図8 学生による木彫作品

## 6 彫刻的技術と工程（4回生）（年間の授業で週に8時間）

この授業で得る能力と目的

- ・ 形と寸法の決定によって彫刻としての成形と思考を完全なものにする。
- ・ 素材の美的選択と技術的な面での問題の正しい解決。

#### 内容

- ・ 第一に、制作作品の文章で表現。そして堅い素材を使った模型の成形。学生の研究作業に基づいた個人的な彫刻プロジェクトの具体的な実施。90×50×50cm以上のサイズでプロジェクトを実行する。材料などを明記し、適切な図で示した工程の記録。

#### 検証

彫刻をつくるためにはそれぞれに見合った技術が必要になる。これは当たり前のことであるが、この授業では彫刻を成り立たせるための技術を計画的に選び、使うことができるように教授されている。そうした技術指導をするのは教員だけではない。アトリエにはテクニコ (tecnico) と呼ばれる技術のみを教えるスタッフが5～6人存在する。彼らは朝の8時から夜の10時まで2人以上常駐し、技術指導や機械・道具の修理を行っている。よって、授業時間外でも制作上の技術的問題をテクニコに相談することができる。これは、技術に関する指導、体制は日本よりもはるかに進んでいると言える。



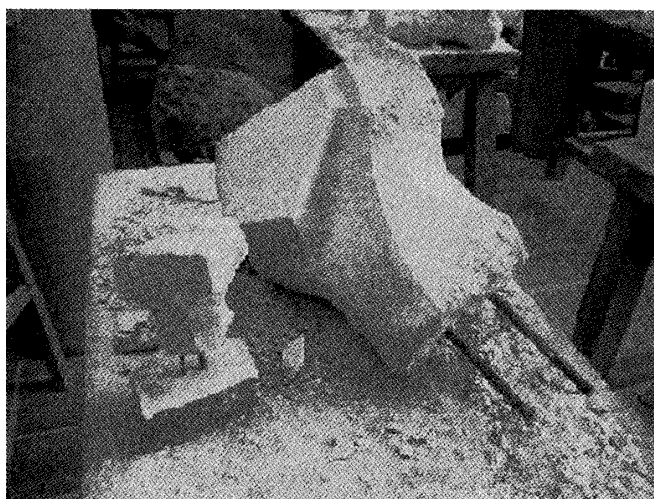


図9 学生による模型（マケット）と大理石の作品



図10 学生による大理石の作品

また、制作中の技術選択がしやすいようにアトリエ（制作室）がつけられている点にこの大学の特徴がある。彫刻科の棟は2階建ての大きな体育館のような建築で、石・木・鉄・粘土・石膏というように素材別にアトリエがあり、それぞれの部屋が隣同士でつながっている。よって、学生が一つの作品をつくる時も様々な彫刻技術を同時進行的に使い、制作していくことができる。このようなアトリエは素材を組み合わせる時も移動しやすく、いつも数種類の素材に囲まれ、新たな彫刻の創造に繋がるすばらしい環境になっている。



図11 石彫のためのアトリエ



図12 鉄彫・金属加工のためのアトリエ



図13 木彫のためのアトリエ



図14 粉塵を伴う作業のための屋外アトリエ



## 7 芸術的創作におけるアイデア、コンセプト、工程

(4回生) (年間の授業で週8時間) (グループA)

この授業で得る能力と目的

内容

- ・ 造形的伝達手段の実践と理解。
- ・ 柔らかい素材を使う制作実習。
- ・ 生物形体の感覚の確認。
- ・ 伝達手段の種類の過程的な経験。
- ・ 生き生きとした形体表現に富む特徴の分析。
- ・ 塑像による自然の解釈。(粘土で)
- ・ 描写手段の実験。
- ・ 個人的解決法の公式化。

検証

この授業では基本的にマケット(模型)とその作品のコンセプトが書かれたレポートでの提出となる。作品を成り立たせるためのアイデアとコンセプトを考え、まとめる力を育成させる教授法が採られている。

## 8 芸術的創作におけるアイデア、コンセプト、工程

(4回生) (年間の授業で週8時間) (グループB)

この授業で得る能力と目的

- ・ 創作過程の基盤として形態と空間が互いにつながりあっているという概念。
- ・ 事前の分析と定められた量感の制作によって、彫刻的量感を正確に理解する。
- ・ 個人的作品の創造を目指して自由な解釈で主張し、周りを取り囲む現実の調査をしながら創造の必要性をもたらす。

内容

- ・ 自然のモデルを使った粘土での制作。
- ・ 塑像の骨組みの製作。
- ・ 制作に必要なテクニックの知識を深める。
- ・ 薄いレリーフの制作。
- ・ 小さい彫刻へ応用する蠟の技術。
- ・ コンクリートの彫刻の制作過程。

検証

制作のテクニックとバリエーションを広げるために、蠟やコンクリートを使った制作技術も修得させている。ここでは、蠟とコンクリートの彫刻技法の工程を写真とともに見ていきながら検証したい。

<コンクリートの鑄込みの技法><sup>(注2)</sup> 下図①~⑧=図15

- ① 流し型か型として十分な厚紙を組み立てる。型の内の表面に剥離剤を塗る。
- ② 濃いコンクリートを混ぜたものを注ぎ、空気の気泡ができないように棒か細長い板を使い押しながら作っていく。
- ③ コンクリートが安定し平均して広がるように作業台の表面と流し型を繰り返し外す。
- ④ 補強するために、鉄の棒を型の中にはまるよう折り曲げ、コンクリートの層に置く。
- ⑤ 型がいっぱいになるまでコンクリートを流し続ける。
- ⑥ コンクリートの同じ形を配列していくために、型の周囲全体を木槌で叩き、木枠である型を外しやすくしておく。
- ⑦ 木の細い板で型を引っ張りながら、コンクリートの上の部分を水平にする。
- ⑧ 湿った布で型を被い、コンクリートが固まらないようにする。

この技法を修得することで新しい形と空間を得ることができる。スペインの彫刻家エドゥアルド・チリーダはこの技法を使って作品を制作している。図15のようにコンクリートを型で鑄込み、それらを多数つなぎあわせることで大きな形と新しい空間を提示している。

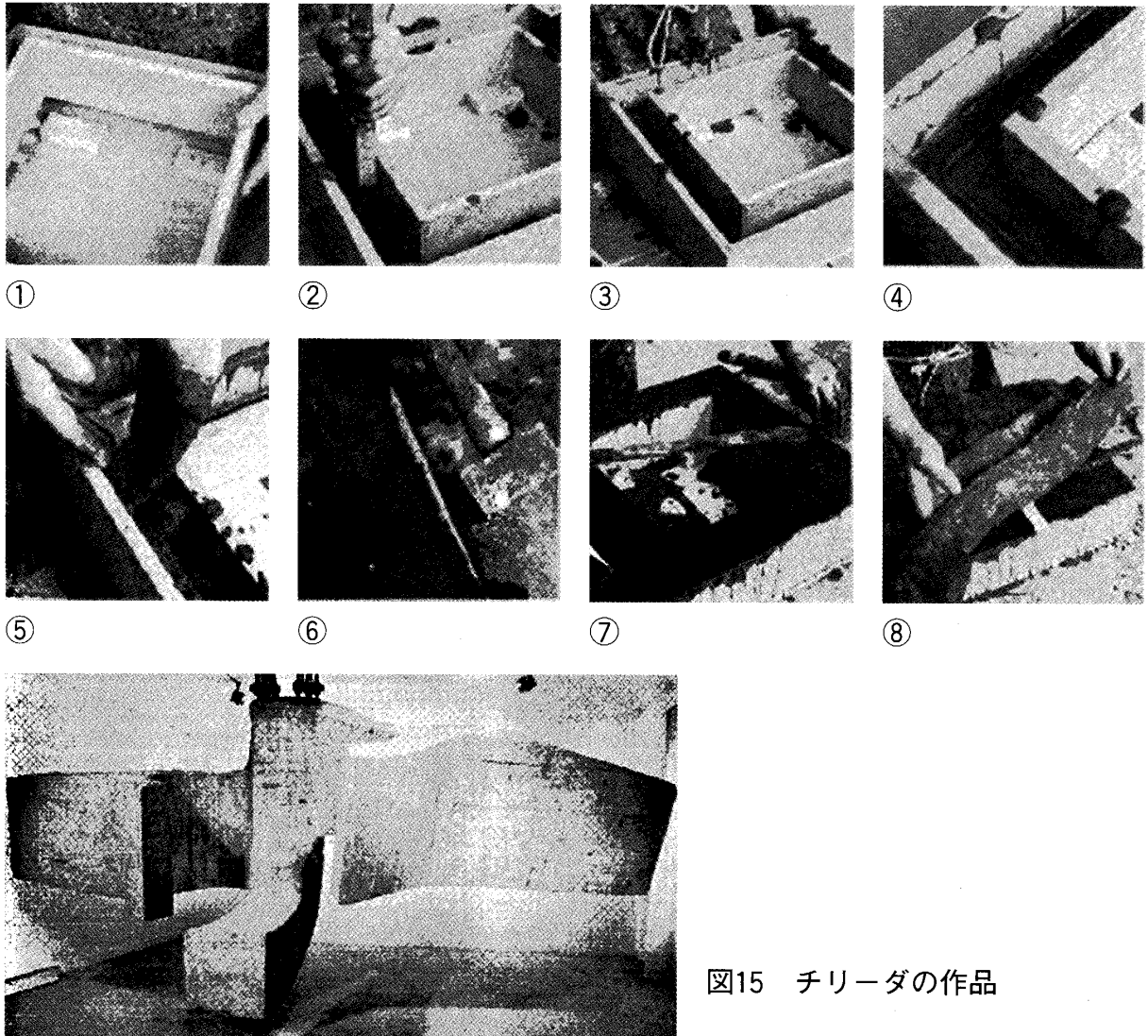
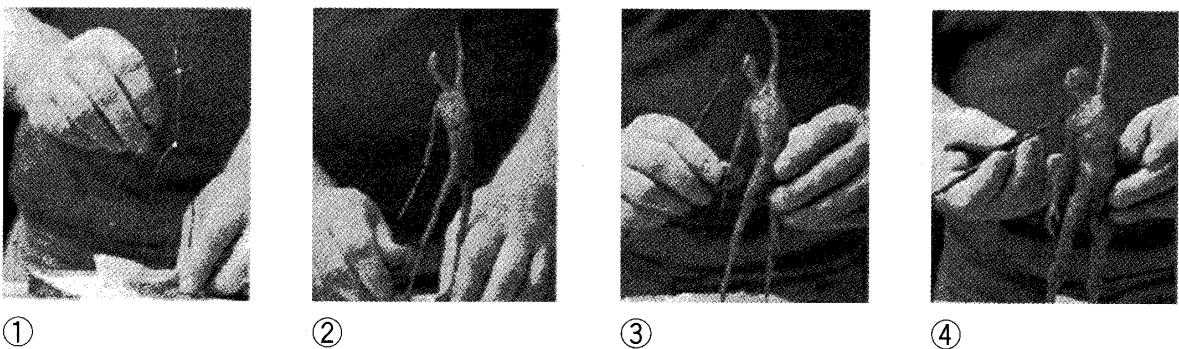
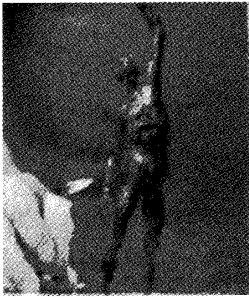


図15 チリーダの作品

< 蝋を使ったじか付け技法 > <sup>(註3)</sup> 下図①～⑤＝図16

- ① 心棒のためにブロンズ溶接や銅、針金を使う。
- ② 基本的な形をつくるために指で小さな蝋のかたまりを心棒の上に押し付けて形づくる。
- ③ 少しずつ蝋を付け加え、ボリュームを出し、形づくる。
- ④ 表面の精巧な形をつくるために金属の道具を使って、小さな蝋を付ける。
- ⑤ 色を暗くしたり、深みを出したり、固くするためにろうそくで表面を少しあぶる。





### 検証

この蠟のじか付け技法を用いることによって小さくて精巧な彫刻をつくることができる。粘土とは違った質感の発見と研究により効果をもたらすであろう。また、蠟の作品の完成後、鑄込みの技法で金属に変えることも考えられる。

⑤

## 9 プロジェクト I (4回生) (年間授業で週8時間)

この授業で得る能力と目的

- ・ 使用する素材の状態と概念的な見方に注意を払いながら彫刻作品を計画、制作することによって彫刻家としての態度と思考を確立する。
- ・ 批評の能力を伸ばし、個人の研究と知識によって審美眼を發展させ、慎重で柔軟に問題の解決に導くよう、作業での規律を学ぶ。

内容

- ・ 個人的に提案したプロジェクトの研究。スケッチから始まり、小さいマケット (模型) の制作、量感の研究。拡大そして、最終的な素材での制作。
- ・ 紹介した提案から2作品を実行し、そのうち一つは木か石を使って制作する。スケッチ、見積り、制作過程、最終的な結果など、作品テーマの観念的な関わり合いが反映するものを書いた記録を添える。

検証

自己の受講作品の制作過程をもとに検証する。

- ①：はじめにアイデアスケッチを5~10パターン描く。素材とその使い方も記入する。
- ②：①を教授とのディスカッションで、自己の表現したい内容を深く検討する。
- ③：アイデアを一つに絞り、素材を購入する。素材購入は技術スタッフと話し合う。
- ④：マケットをプラスチック粘土でつくる。プラスチック粘土は油粘土ほどべたつかず、安価な人工粘土である。色は白、赤、緑、黄などがある。マケットにも太い針金で心棒をつくる。
- ⑤：マケットに対して教授と再度、検討を行う。特に、制作しようとする形が実際に拡大可能なかを考慮しながらマケットを慎重に修正していく。
- ⑥：実際に鉄を用いての制作を始める。
- ⑦：⑥の制作過程ではマケットと実材の違いからくる形体や質感の再検討を行う。
- ⑧：完成させ、批評を受け、今後の課題と方向を考える。

このようにマケットを必ずつくり、何度も繰り返しマケット修正を行う。よって、マケットでの検討が長く、慎重に進められる制作過程が彫刻科の特質の一つと言える。

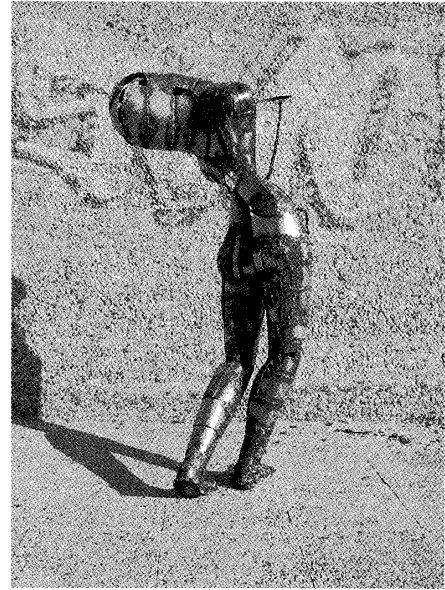


図17 自己作品 鉄での人体表現（正面） 図18 自己作品 鉄での人体表現（背面）

## 10 プロジェクトⅡ（5回生）（年間授業で週8時間）

この授業で得る能力と目的。

- ・ この授業では、常にオリジナル作品の制作へと学生の興味を刺激させる。

内容

- ・ 学生の個性を表すオリジナル作品の制作。造ろうとする形を理解し、展開する目的でスケッチをし、マケットを作り、粘土で塑像を制作する。

検証

ヌードモデルを使った塑像の制作では、各個人の個性的表現が求められていた。ここでも全身像の制作前にマケットでの検討がなされている。作品のタイプに沿った正確な骨組みを作り、金属の構造、生きたヌードモデルの十分な解釈が必要になる。

## 11 彫刻的言語（彫刻的伝達手段）（5回生）（年間授業で週6時間）

この授業で得る能力と目的。

- ・ 実践によって彫刻的言語の内容を深め、芸術的な能力を発展させる。
- ・ 想像の世界は自由であり、一般的な感覚と理性に反発する。
- ・ 芸術家の役割は、観衆に自分自身の作品について深く考えさせることである。それは、芸術をただ作るのではなく、自分自身の世界を豊かにするために作品を熟考する。
- ・ 複数の思考を持つことで、単純なアイデアの表現を避ける。絶対的なものから違う見方を明示し、明白なものから衝撃を生む形を追求する。
- ・ 個人的な造形の研究のために不可欠な基礎基本を勉強し、計画し、実践する方向へ導く。この過程で、彫刻的表現のいかなるタイプにもうまく向かい合えるように、学生は最初の必要条件として、テーマごとに提案されるコンセプトの言語的鮮明さを追求しなければならない。そうすることで、言語（伝達手段）のレベルを強化できる。

内容

- ・ 今の時代を表現する能力を身につけるために、社会的な本質としてもっている美学的なものの重視。経験で知ったものと約束事の両方からの実践。

- ・ 現代思想について適切な知識。
- ・ 今世紀の良い芸術の吸収。

#### 検証

1年間で6つのプロジェクトを実行する実技的な制作を行なっている。そのとき、学生が一つの基盤を得るために教員が一つのテーマを与え、理論的に制作を進める点が注目される。アイデアの提起から終わりまで教員と話し合いの中で決めていき、形、コンセプトを発展させていく教授法が採られている。これらの支柱は彫刻を通して伝わる言語（伝達手段）を発展でき、広げるために貴重と言える。



図19 木彫制作中の学生

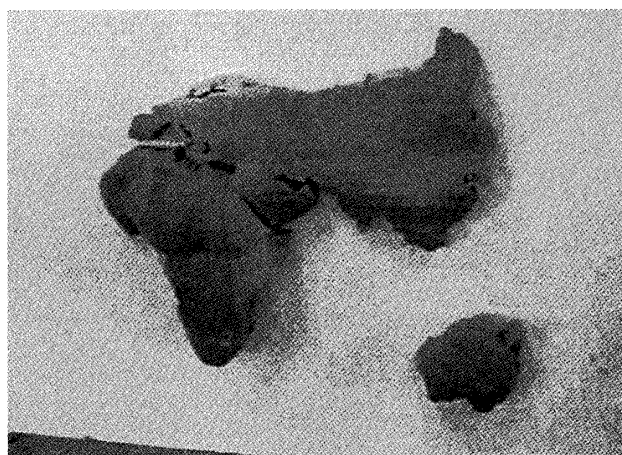


図20 世界地図と人体像の組み合わせ 学生作品

### 12 メダルⅠ（4回生か5回生）（年間授業で週6時間）

この授業で得る能力と目的。

- ・ 貨幣などの円形浮き彫りの薄いレリーフの技術的な細部の表言方法。
- ・ レリーフの量感による空間の解釈能力の発展。
- ・ 初めの段階でのイメージの確立、応用の縮小版、コピー（複製）の手順を知る。
- ・ 用途の特殊な材料と工程を知る。

#### 内容

- ・ 薄いレリーフ制作での基本的要素：視点、深さ、遠近法、現実空間と描写された空間。
- ・ 縮小と複製の工程：材料と技術。
- ・ 歴史的遠近法：象徴学と金石学の使用とメダルの現在の役割。
- ・ 刻印と鋳造の原型の工程と材料。

#### 検証

まず、制作するための理論の授業があり、その後に個別のプロセスに沿っての実技授業が行われている。

### 13 メダルⅡ（5回生）（年間授業で週8時間）

この授業で得る能力と目的。

- ・ メダルの芸術的な分野への応用プロジェクト。

- ・ 記念碑的な伝達手段としての寓意的、象徴的関係の知識。
- ・ 表現に富んだ外観の追求と薄いレリーフの実現。調和、感受性を与える能力の発展。
- ・ 鑄造と溶解のための縮小技術の実技と知識。

#### 内容

- ・ 薄いレリーフの伝達手段：明細な刻印、創作の適応、メダルの飾り。
- ・ メダルの寸法、象徴学と円形の飾り、化粧タイルの混合。
- ・ メダル：小型記念碑、用途とメダル芸術の適用、寓意、象徴、隠喩。
- ・ 碑銘、献辞、記念、文学と彫刻の統一：視覚的な詩。
- ・ 複製の材料、縮小する機械、鑄造と溶解。
- ・ 展開するプロジェクトとしてのメダル。
- ・ メダルでの肖像画。



図21メダルⅠの授業での学生作品（粘土）

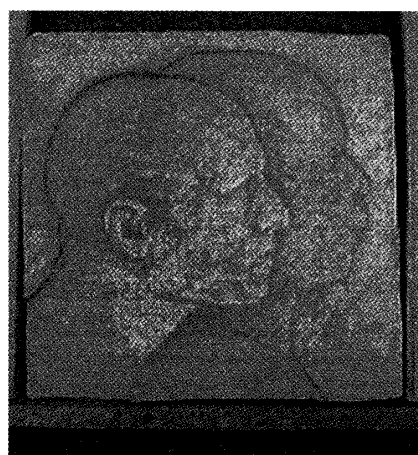


図22メダルⅡの授業での学生作品（粘土）

### Ⅲ コンプルテンセ大学における彫刻教育の特質について

スペインのコンプルテンセ大学の彫刻教育の特質は様々な面で見受けられ、大きく次の5つの項目に集約した。

- ① 制作過程においてはマケットを必ず作り、何度も繰り返しマケット修正を行う。マケットでの検討が長く、慎重に進められる制作過程が特質の一つと言える。また、マケットは、模倣的に移すためのあらかじめ決められた解決法としてではなく、制作する時の熟考と作品へのアプローチの道具として解釈され、指導されている。
- ② マドリッドではレアリスム絵画・彫刻が歴史的に伝承されている。そうした背景のもと、コンプルテンセ大学では具象を中心に、そして大事に教える教授陣が多い。しかし、その一方で、抽象彫刻・キュービズム的立体も多く指導している。これはピカソに始まり、鉄の彫刻家チリーダまでのスペインの彫刻の歴史的影響である。このようにマドリッドとスペインの伝統を尊重し、継承していこうとする教授法が見られる。
- ③ 各技法の指導の徹底が確立されている。特に、「素材と彫刻的技術」「創造と彫刻的技術」「彫刻的技術と工程」の授業では、学生が創り出そうとする形をどうすれば実現可能かという点を重視している。それに加え、アトリエで常駐し、毎日、技術的指導をしているテクニコ(技術スタッフ)の存在も大きい。



- ④ 彫刻的言語（彫刻的伝達手段）とは「形が持っている深い意味を理解し、表現する能力」であり、彫刻的言語という言葉が教員と学生が共通認識として使っている。また、今の時代を表現する能力を身につけるために、歴史的に生まれてきた様々なタイプの表現様式としての伝達手段を身に付け、さらに展開されるように指導されている。
- ⑤ 制作中の技術選択がしやすいようにアトリエ（制作室）がつくられている点にこの大学の特徴がある。それぞれの素材別アトリエが隣接していて、学生が一つの作品をつくる際、様々な彫刻技術を同時に使い、制作していくことができる。素材を組み合わせる時も移動しやすく、いつも数種類の素材に囲まれる環境は新たな彫刻の創造を育み、偉大な芸術家を輩出している。

## 注

- 1 コンプルテンセ大学美術学部彫刻科のカリキュラム 2004年度
- 2 BARRY MIDGLEY “GUIA COMPLETA DE ESCULTURA, MODELADO Y CERAMICA, TECNICAS Y MATERIALES”（彫刻の完全ガイド、塑像と陶芸、技術と素材）1999 p.165
- 3 同上 1999 p.58

## 図版出典

- 図6 EXPOSICION ANTOROGICA Antonio Lopez PINTURA, ESCULTURA, DIBUJO（アントニオ・ロペス展覧会図録 絵画 彫刻 デッサン）1993 p.187
- 図15 BARRY MIDGLEY “GUIA COMPLETA DE ESCULTURA, MODELADO Y CERAMICA, TECNICAS Y MATERIALES”（彫刻の完全ガイド、塑像と陶芸、技術と素材）1999 p.165
- 図16 同上 1999 p.58

## 参考文献

- ・コンプルテンセ大学美術学部彫刻科のカリキュラム 2004年度
- ・UNIVERSIDAD COMPLUTENSE DE MADRID 2003—2004 PLANES DE ESTUDIO（コンプルテンセ大学2003—2004学習計画）
- ・BARRY MIDGLEY “GUIA COMPLETA DE ESCULTURA, MODELADO Y CERAMICA, TECNICAS Y MATERIALES”（彫刻の完全ガイド、塑像と陶芸、技術と素材）1999 p.165

## 付記

本稿を作成するにあたり、難波と福田が企画し、難波が執筆し福田がまとめた。